



鹿児島県本土と宮古諸島で採集されたマツゲハゼの記録

中村亮太¹・是枝伶旺²・本村浩之³

Author & Article Info

¹ 鹿児島大学水産学部（鹿児島市）

k9948835@kaij.jp

² 鹿児島大学大学院連合農学研究科（鹿児島市）³ 鹿児島大学総合研究博物館（鹿児島市）

motomura@kaum.kagoshima-u.ac.jp (corresponding author)

Received 09 July 2025

Revised 18 July 2025

Accepted 19 July 2025

Published 22 July 2025

DOI 10.34583/ichthy.57.0_20

Ryota Nakamura, Reo Koreeda and Hiroyuki Motomura. 2025. Records of *Oxyurichthys ophthalmonema* (Gobiidae) from Kagoshima mainland and the Miyako Islands, southern Japan. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 57: 20–27.

Abstract

Four and two specimens of an eyebrow goby, *Oxyurichthys ophthalmonema* (Bleeker, 1856), were collected from southern Satsuma Peninsula, Kagoshima Prefecture, Kyushu, and Miyako-jima island, Miyako Islands, Ryukyu Islands, Japan, respectively. In Japanese waters, the species has been recorded from Chiba, Kanagawa, Shizuoka, Wakayama, Kochi, Nagasaki, and Kagoshima prefectures, and the Ryukyu Islands (the Osumi, Amami, Okinawa, and Yaeyama islands). However, the records from the Kagoshima mainland of the species were based on mis-identifications with *Oxyurichthys cornutus* McCulloch and Waite, 1918 or lacked reliable vouchers or enough information for their re-identifications. Therefore, the present specimens from the Satsuma Peninsula and Miyako-jima island represent the first reliable records of the species from Kagoshima mainland and the Miyako Islands.

マツゲハゼ *Oxyurichthys ophthalmonema* (Bleeker, 1856) はハゼ科サルハゼ属 *Oxyurichthys* Bleeker, 1857 の一種で、河口域の泥底や軟泥底に生息する（瀬能ほか, 2021）。本種はこれまで日本国内において、千葉県から鹿児島県本土にかけての太平洋沿岸、福江島、上甕島、および琉球列島から記録されていたが、鹿児島県本土における記録は根拠となる標本や写真が存在しなかった（明仁親王, 1972；池, 1995；鈴木ほか, 2000；三宅ほか, 2006；明仁ほか, 2013；吉郷, 2014；渋川ほか, 2017；Nakae et al., 2018；森口,

2019；瀬能ほか, 2021；岡村ほか, 2022；Motomura, 2023；山川ほか, 2024）。

2022 年 9 月から 2024 年 8 月にかけて 4 個体のマツゲハゼが鹿児島県薩摩半島南岸で採集された。また、2023 年 2 月に 2 個体のマツゲハゼが宮古島で採集された。これらはそれぞれ本種の標本に基づく鹿児島県本土および宮古島からの確実な記録となるため、ここに報告する。

材料と方法

標本の計数・計測方法は基本的に渋川ほか（2017）に、背鰭と臀鰭基底長の計測は中坊・中山（2013）にしたがった。標本の作製、登録、撮影、および固定方法は本村（2009）に準拠した。標準体長（standard length）は体長または SL と表記した。計測はデジタルノギスを用いて 0.1mm 単位まで行った。本報告に用いた標本は鹿児島大学総合科学博物館（KAUM）に保管されており、上記の生鮮時の写真は同館のデータベースに登録されている。

Oxyurichthys ophthalmonema (Bleeker, 1856)

マツゲハゼ

(Figs. 1, 2; Table 1)

標本 6 標本（体長 23.0–63.4 mm）— 鹿児島県本土：KAUM-I. 173241, 体長 29.5 mm, 南九州市颯娃町別府水成川, 水深 0.1 m, タモ網, 2022 年 9 月 10 日, 是枝伶旺；KAUM-I. 179072, 体長 23.0 mm, KAUM-I. 179495, 体長 63.4 mm, 指宿市大牟礼 二反田川, 水深 0.2 m, タモ網, 2023 年 1 月 5 日, 古橋龍星・是枝伶旺・久木田直斗；KAUM-I. 211318, 体長 27.6 mm, 南九州市颯娃町別府番所鼻自然公園地先, 水深 0.2 m, タモ網, 2024 年 8 月 7 日, 中村亮太。宮古島：KAUM-I. 180715, 体長 39.6 mm, KAUM-I. 180716, 体長 24.8 mm, 沖縄県宮古島市下地川満 川満漁港北側の干潟, 水深 0.3 m, タモ網, 2023 年 2 月 23 日, 是枝伶旺。

記載 計数・計測値を Table 1 に示す。体は細長く、側

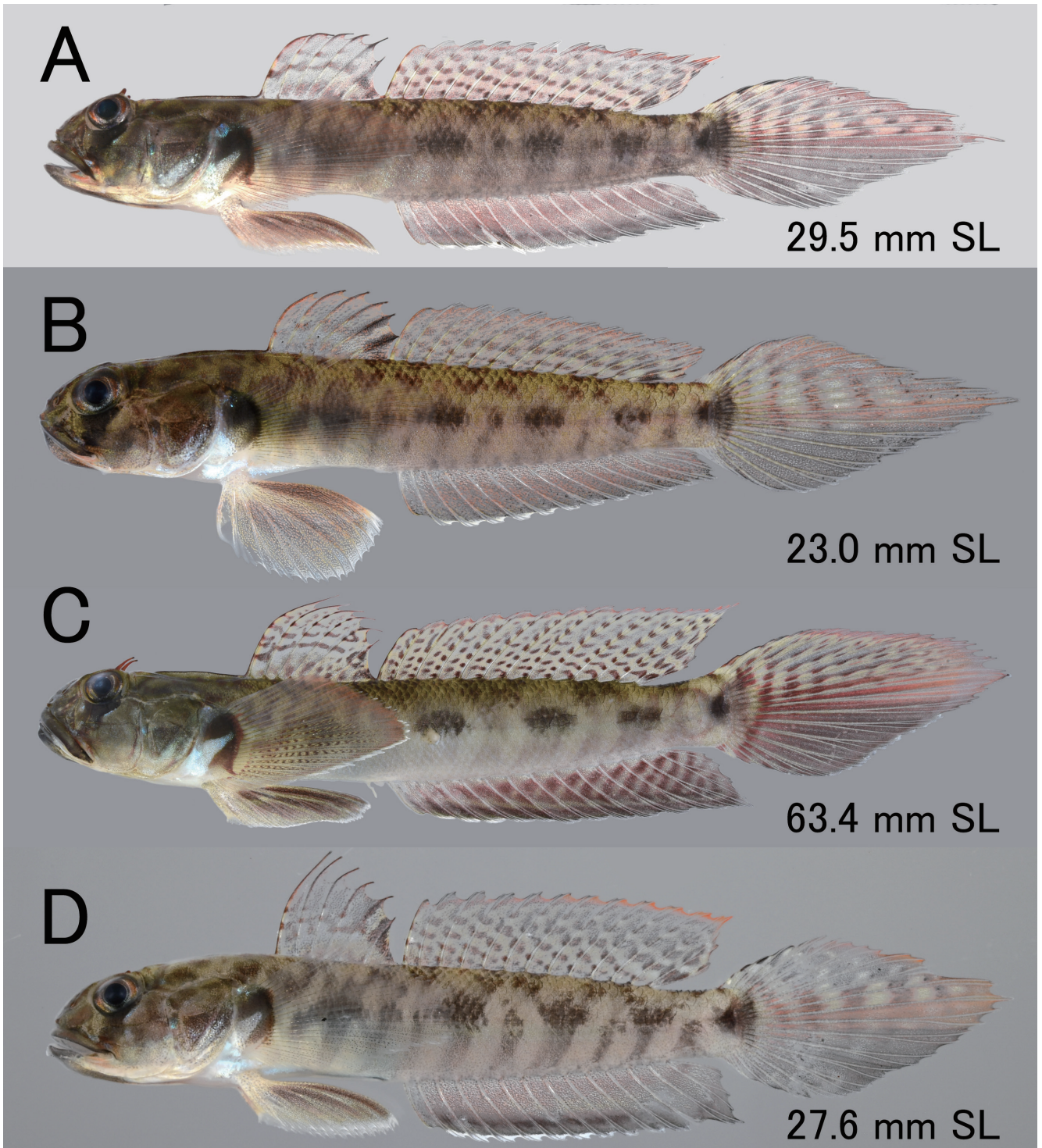


Fig. 1. Fresh specimens of *Oxyurichthys ophthalmonema* from the Satsuma Peninsula, Kagoshima mainland, Kagoshima Prefecture, Japan (A: KAUM-I. 173241, 29.5mm SL; B: KAUM-I. 179072, 23.0 mm SL; C: KAUM-I. 179495, 63.4 mm SL; D: KAUM-I. 211318, 27.6 mm SL).

扁する。吻端は丸みを帯びる。鼻孔は2対あり、前鼻孔は短い鼻管の先端に開孔し、鼻管の先端は上顎前端を越えない。後鼻孔は円形で、眼窩前縁と前鼻孔の中間に位置する。口裂は端位で体軸に対して約25度上方へ傾く。上顎前端と下顎前端はほぼ同位。上顎および下顎の後端は瞳孔中央直下に達する。上唇の上縁中央は窪まない。上顎の歯は1列。下顎の歯は前方で2列、後方では不規則な2-3列となり、外側の歯は内側のものより大きい。両顎歯の先端は尖る。

眼は頭部背側に位置し、細長い眼上皮弁がある (KAUM-I. 179072, 180716, 211318 は未発達)。両眼間隔は狭い。主鰓蓋骨後縁は円滑で緩やかな弧を描く。鰓孔は狭く、鰓孔上端は胸鰭基底上端の前方に位置し、鰓孔下端は前鰓蓋骨後縁直下より後方に位置する。主鰓蓋骨中央の直上から第1背鰭基部にかけての頭部背面正中線上には皮質隆起がある。

頭部、頭部背面正中線上の皮質隆起、峡部および各鰭

は無鱗 (KAUM-I. 179495 の峡部は円鱗に被われる)。第2背鰭起部付近から前方の軀幹部は円鱗に被われ、それより後方は櫛鱗に被われる。項部の被鱗域前縁は体背面中央を中心に後方に湾入する。項部は胸鰭基底直上付近、後頭部側面は主鰓蓋骨中央直上付近がそれぞれ被鱗域前端。小型個体 (KAUM-I. 173241, 179072, 180716, 211318: 体長 23.0–29.5 mm) の項部は無鱗で、体部の被鱗域前端は胸鰭基底直上付近。

第1背鰭起部は腹鰭基部後端直上より後方に位置する。第1背鰭棘はいずれもわずかに伸長し、第1棘が最長で、

第6棘が最も短い。第1背鰭の外縁は第2–4棘間でほぼ等高 (KAUM-I. 211318 は第2棘から第4棘にかけて低くなる)。第1背鰭と第2背鰭は鰭膜でわずかに繋がりが、第2背鰭起部は臀鰭起部より前方に位置する。第2背鰭基底後端は臀鰭基底後端より前方に位置する。臀鰭起部は肛門直後に位置し、臀鰭基底後端は第2背鰭基底後端直下より後方に位置する。第2背鰭および臀鰭軟条部の外縁は体軸とほぼ平行。胸鰭は円形で、後端は第2背鰭起部直下を越える。胸鰭基底上端はその下端より後方に位置する。腹鰭は左右が繋がりが、吸盤状。腹鰭起部は胸鰭基底下端よりわず

Table 1. Counts and measurements of *Oxyurichthys ophthalmonema* from Kagoshima mainland, Kagoshima Prefecture, and Miyako-jima island, Miyako Islands, Okinawa Prefecture, Japan.

	Kagoshima mainland <i>n</i> = 4	Miyako-jima island <i>n</i> = 2
Standard length (SL; mm)	23.0–63.4	24.8–39.6
Counts		
Dorsal-fin rays	VI-I, 12 (4)	VI-I, 12 (2)
Anal-fin rays	I, 13 (4)	I, 13 (2)
Pectoral-fin rays	21 (1), 22 (3)	22 (1), 23 (1)
Pelvic-fin rays	I, 5 (4)	I, 5 (2)
Segmented caudal-fin rays	9+8 (4)	9+8 (2)
Branched caudal-fin rays	7+7 (3), 8+7 (1)	8+7 (1), 7+7 (1)
Predorsal-scales	0 (3), 12 (1)	0 (1), 6 (1)
Lateral scales	48 (1), 51 (2), 53 (1)	49 (1), 50 (1)
Transverse scales ¹	16 (1), 17 (2), 21 (1)	16 (1), 18 (1)
Transverse scales ²	14 (1), 15 (1), 17 (1), 18 (1)	14 (1), 16 (1)
Transverse scales ³	15 (1), 16 (2), 17 (1)	14 (1), 16 (1)
Measurements (%SL)		
TL	135.8–144.7	136.8–139.4
Head length	25.1–28.3	26.4–27.2
Head depth	14.6–17.2	15.0–15.3
Head width	13.6–15.7	13.7–14.3
Snout length	7.3–8.4	7.0–8.0
Jaw length	10.9–12.9	10.9–11.6
Orbit length	6.2–7.5	6.9–7.6
Interorbital width	1.4–1.9	1.3–1.8
Body depth	14.0–16.7	13.3–16.4
Body with	8.2–10.3	8.2–10.9
Pre-dorsal-fin length	29.8–34.7	32.9–35.1
Pre-pelvic-fin length	25.3–27.3	25.7–26.2
Pre-anal-fin length	50.9–52.7	50.6–52.1
Preanal length	47.8–49.6	47.9–48.7
Caudal-peduncle length	10.2–11.3	11.1–11.4
Caudal-peduncle depth	8.5–9.7	8.5–10.0
Pectoral-fin length	24.2–26.5	24.2–24.7
Pelvic-fin length	24.1–25.5	23.0
Caudal-fin length	38.7–42.8	39.9–45.7
Basal length of first dorsal fin	16.2–18.8	16.6–17.6
Basal length of second dorsal fin	35.2–38.5	37.0–37.4
Basal length of anal fin	36.8–40.2	38.1–39.1
Measurements (%HL)		
Head depth	58.1–61.1	56.1–56.9
Head width	51.8–55.9	52.0–52.5
Snout length	26.2–31.3	25.8–30.2
Jaw length	38.6–47.7	40.2–44.0
Orbit length	24.7–26.6	26.1–27.9
Interorbital width	5.5–6.8	4.6–6.7

¹between anal-fin origin and 1st dorsal-fin base; ²anal-fin origin and 2nd dorsal-fin base; ³2nd dorsal-fin origin and anal-fin base.

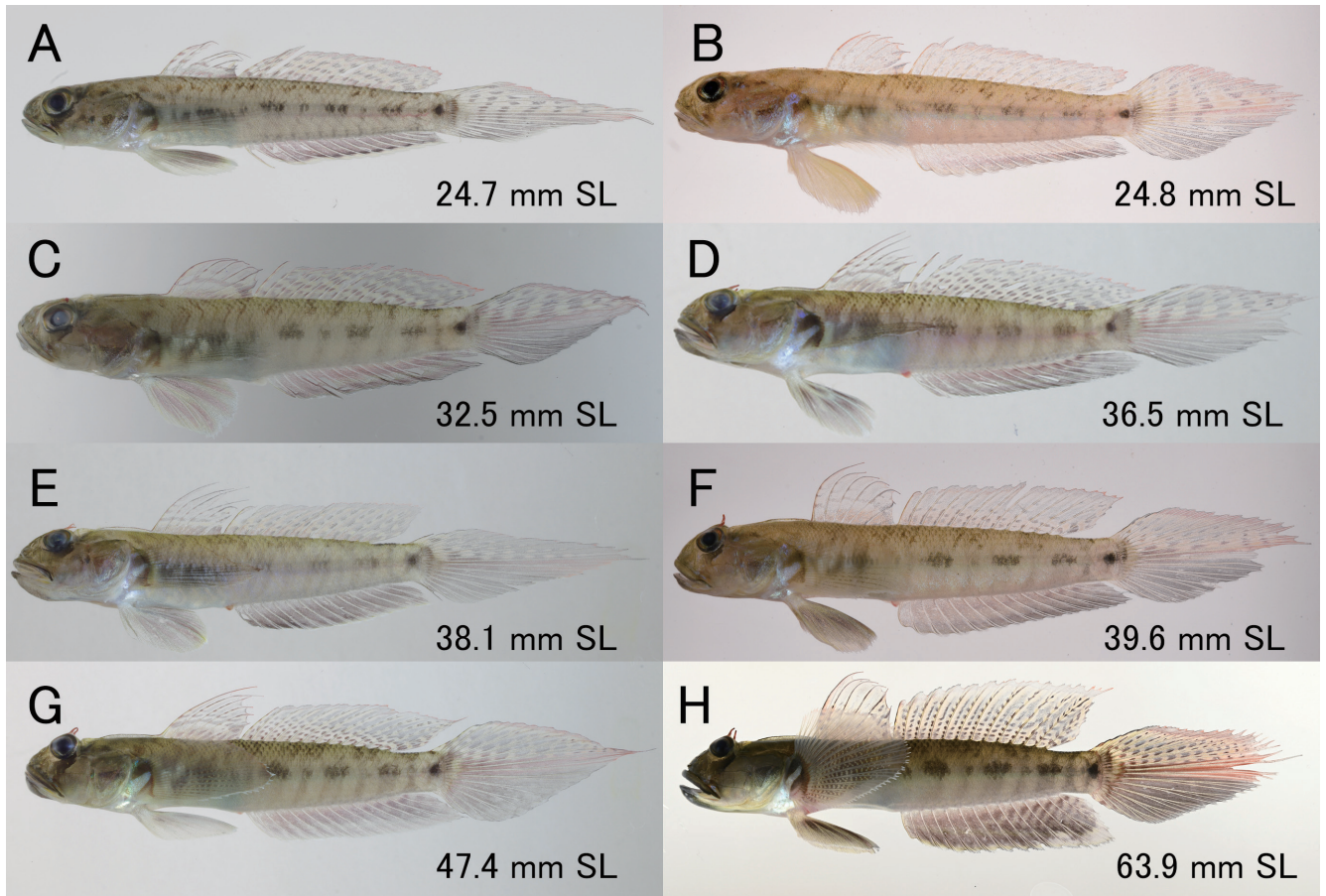


Fig. 2. Fresh specimens of *Oxyurichthys ophthalmonema* from Tanega-shima (A, C) and Amami-oshima (D, E, G, H) islands, Kagoshima Prefecture, and Miyako-jima island (B, F), Okinawa Prefecture, Japan (A: KAUM-I. 132859, 24.7 mm SL; B: KAUM-I. 180716, 24.8 mm SL; C: KAUM-I. 132886, 32.5 mm SL; D: KAUM-I. 134128, 36.5 mm SL; E: KAUM-I. 134129, 38.1 mm SL; F: KAUM-I. 180715, 39.6 mm SL; G: KAUM-I. 134132, 47.4 mm SL; H: KAUM-I. 215427, 63.9 mm SL).

か前方に位置し、たたんだ腹鰭後端は肛門に達するかまたはわずかに達しない。尾鰭は尖形で、後端が伸長する。

色彩 生鮮時 (Figs. 1, 2) 一頭部背面と側面は暗い褐色。体背面と体側は褐色で、体側下部になるほど淡くなる。頭部下面および腹部は黄色みがかった白色。虹彩上部は褐色で下部は青色、前方と後方は金色。眼上皮弁は暗赤色。眼縁から上顎にかけて斜帯が2本あり、前方の斜帯は暗赤褐色で細く、眼前縁下部から上顎中間部へ達する。後方の斜帯は黒色がかかった灰色で前方のものより太く、眼下縁から上顎後端に達する。後方の斜帯および前鰓蓋の後縁には青色斑がある。体背面には不明瞭な暗赤褐色斑が並ぶ。第1背鰭基底直下から尾柄部までの体軸上に楕円形で不明瞭な黒色がかかった灰色斑が5つ並び、それらの下部から臀鰭基底にかけて不明瞭な淡い灰色帯が伸びる。体軸上の灰色斑の間にはそれらより小さい灰色小斑や細い灰色帯が不規則に存在する。第1背鰭の鰭膜は下部が黄緑色、上部が白色半透明で、前方から後方にかけて不明瞭な赤褐色斑が鰭条付近に2-4列並ぶ。第2背鰭下部の鰭膜は黄緑色で、上部は灰色。第2背鰭は多数の小暗赤褐色斑があり、KAUM-I. 179072, 179495, 180715, 180716では縦列をなし、KAUM-I. 173241, 211318では後方に向けて傾斜する斜列をなす。

第2背鰭の小暗赤褐色斑は上部のものほど不明瞭になる (KAUM-I. 180716では一様に不明瞭)。各背鰭の上縁は橙色に縁どられる。胸鰭の鰭膜は白色半透明で、下部には不明瞭な黒色点列がある。大型個体 (KAUM-I. 179495, 体長 63.4 mm) の胸鰭下部の黒色斑は明瞭で、胸鰭上縁は橙色に、下縁は白色にそれぞれ縁どられる。胸鰭基底には蹄型の黒褐色斑がある。胸鰭基底上部には青色斑がある。腹鰭は白く縁どられ、鰭膜は赤褐色で、鰭条は淡い黄色。臀鰭は下縁側から白、暗赤褐色にそれぞれ縁どられ、鰭膜は淡い赤褐色。臀鰭基底に沿って不明瞭な灰色帯がある。尾鰭は上縁が橙色、下縁が白色にそれぞれ縁どられ (KAUM-I. 211318は尾鰭下縁の白い縁どりを欠く)、鰭膜は上部が黄緑色で下部が赤褐色。尾鰭基底中央には不明瞭な黒色がかかった灰色斑がある。尾鰭上部には不明瞭な赤褐色斑が鰭条に沿って並ぶ。腹鰭以外の鰭条は白色半透明。

分布 マツゲハゼは南アフリカ東岸、ミャンマー、アンダマン海、インドネシア西部、フィリピン、ベトナム、台湾、日本、マリアナ諸島、ソシエテ諸島などのインド・太平洋に分布する (明仁ほか, 2013; Pezold and Larson, 2015)。日本国内では千葉県、神奈川県、静岡県、和歌山県、高知県、宮崎県、鹿児島県本土、五島列島 (福江島)、

甌島列島（上甌島）、大隅諸島（種子島）、奄美群島（奄美大島・徳之島）、沖縄諸島（沖縄島・久米島）、宮古諸島（宮古島）、八重山諸島（石垣島・西表島）から記録されている（明仁親王，1972；池，1995；鈴木ほか，2000；三宅ほか，2006；江口ほか，2008；明仁ほか，2013；吉郷，2014；渋川ほか，2017；Nakae et al., 2018；森口，2019；瀬能ほか，2021；岡村ほか，2022；Motomura, 2023；山川ほか，2024；本研究）。

採集時の状況 KAUM-I. 173241 は南九州市水成川で採集された。同所は河口から 250 m ほど上流の右岸に巨岩が散在し、巨岩の間に軟泥が堆積している。本種は軟泥中からタモ網により採集された。同所ではウロハゼ *Glossogobius olivaceus* (Temminck and Schlegel, 1845)、ノボリハゼ *Oligolepis acutipennis* (Valenciennes, 1837)、クチサケハゼ *Oligolepis stomias* (Smith 1941)、カマヒレマツゲハゼ *Oxyurichthys cornutus* McCulloch and Waite, 1918、ヒトミハゼ *Psammogobius biocellatus* (Valenciennes 1837)、およびヒナハゼ *Redigobius bikolanus* (Herre 1927) が採集された。水成川ではこれまでにヒメツバメウオ *Monodactylus argenteus* (Linnaeus, 1758)、ミナミヒメハゼ *Favonigobius reichei* (Bleeker, 1854)、スダレウロハゼ *Glossogobius circumspectus* (Macleay, 1883) など、熱帯・亜熱帯地域を主要な分布域とする魚類が採集されている（是枝・本村，2022；出羽ほか，2022；是枝ほか，2024）。

KAUM-I. 179072, 179495 は指宿市二反田川で採集された。同所は温泉水が流入する水路の合流地点の直下で、本種は温泉水と河川水が混ざりあう部分で採集された。同所ではヒメハゼ属の一種 *D Favonigobius* sp. *D* sensu Momose (2024)、ウロハゼ、ヒトミハゼ、カマヒレマツゲハゼ、コガネチワラスボ *Taenioides gracilis* (Valenciennes 1837)、およびヒゲワラスボ属の一種 *Trypauchenopsis* sp. が採集された。

KAUM-I. 211318 は南九州市番所鼻自然公園地先において、淡水流入があり底質が砂泥となっている岩礁性海岸の一角で採集された。同所では継続的な採集調査が行われており、これまでにホホグロスジハゼ *Acentrogobius suluensis* (Herre, 1927)、トサカハゼ *Cristatogobius lophius* Herre, 1927、オオモンハゼ *Gnatholepis anjerensis* (Bleeker, 1851)、カマヒレマツゲハゼ、ミナミサルハゼ *Oxyurichthys lonchotus* (Jenkins, 1903)、ツムギハゼ *Yongeichthys nebulosus* (Forsskal, 1775) などの、河口や内湾に生息し、熱帯・亜熱帯域を主要な分布域とするハゼ科魚類が採集されている（森下・本村，2019；古橋ほか，2019；是枝ほか，2022；是枝・本村，2022）。

KAUM-I. 180715, 180716 は、宮古島西部の川満漁港北側にある泥質の前浜干潟で採集された。同所には海岸から多量の淡水が湧出しており、干潮時には幅 3 m ほどの滞筋

が形成されていた。本種はツマグロスジハゼ *Acentrogobius* sp. 2 sensu Akihito et al. (2013) やハゴロモハゼ *Myersina macrostoma* Herre, 1934 などの汽水域から内湾にかけて生息するハゼ科魚類と共に採集された。

備考 記載標本は眼上皮弁を有すること（ただし KAUM-I. 179072, 180716, 211318 にはない）、第 1 背鰭棘がわずかに伸長する程度であること、第 1 背鰭基部後端に明瞭な黒色斑がないこと、体側背部の黒色点がないこと、および背鰭の点列模様が不明瞭であること（ただし KAUM-I. 179495 は明瞭）が鈴木ほか（2000）、渋川ほか（2017）、および瀬能ほか（2021）の示したマツゲハゼの特徴と一致したため本種に同定された。KAUM-I. 179072, 180716, 211318 は眼上皮弁を欠くが、体長が 23.0–27.6 mm であること、眼上に肉質突起を有することから眼上皮弁が発達途中の小型個体であると判断された。

カマヒレマツゲハゼはマツゲハゼと形態的・色彩的特徴がよく似るが、鈴木ほか（2000）と渋川ほか（2017）は第 1 背鰭第 1 棘が著しく伸長すること（マツゲハゼではわずかに伸長する程度）、体側背部各鱗の多くに黒色点があること（黒色点はごく不明瞭）、第 1 背鰭第 6 鰭膜を中心に 1 暗色斑があること（ない）、背鰭や胸鰭に顕著な暗色点列模様があること（点列模様は不明瞭）、第 2 背鰭の黒色斑は鰭膜全体に密在し、斜行する列を形成する傾向があること（縦列を形成する傾向がある）、および第 2 背鰭の鰭条上に斑点がないこと（各鰭条にある）を両種の差異とした。しかし、山川ほか（2024）はカマヒレマツゲハゼの体長 10–30 mm の個体は上述の特徴が十分に発現しておらずマツゲハゼとの識別が困難であるとした。記載標本は KAUM-I. 179495, 180715 を除き、体長 23.0–29.5 mm と小型である。第 2 背鰭の暗色斑は KAUM-I. 173241, 211318 においては斜行し、KAUM-I. 179495 においては第 2 背鰭の暗色斑は明瞭であることにおいて鈴木ほか（2000）と渋川ほか（2017）の示したマツゲハゼの形質とは差異がみられたが、第 1 背鰭棘がわずかに伸長すること、第 1 背鰭基部後方に明瞭な黒色斑がないこと、体側背部の黒色点がないことから本研究においてはマツゲハゼとみなした。

本研究において、上記の標本に加え鈴木ほか（2000）と渋川ほか（2017）の識別形質を基に第 1 背鰭棘が糸状に伸長する、第 1 背鰭基部後方に明瞭な黒色斑がある、体側背部の黒色点がある、第 2 背鰭の黒色斑が鰭膜全体に密在するという特徴からカマヒレマツゲハゼ（体長 20.5–83.6 mm；比較標本を参照）に同定された個体を比較対象に、本研究においてマツゲハゼとみなした個体（体長 24.7–63.9 mm；比較標本を参照）の生鮮時の色彩を比較したところ、後者においても第 2 背鰭に明瞭な黒色斑をもつ個体（KAUM-I. 179495: Fig. 1C）や、斜行する列を形成する個

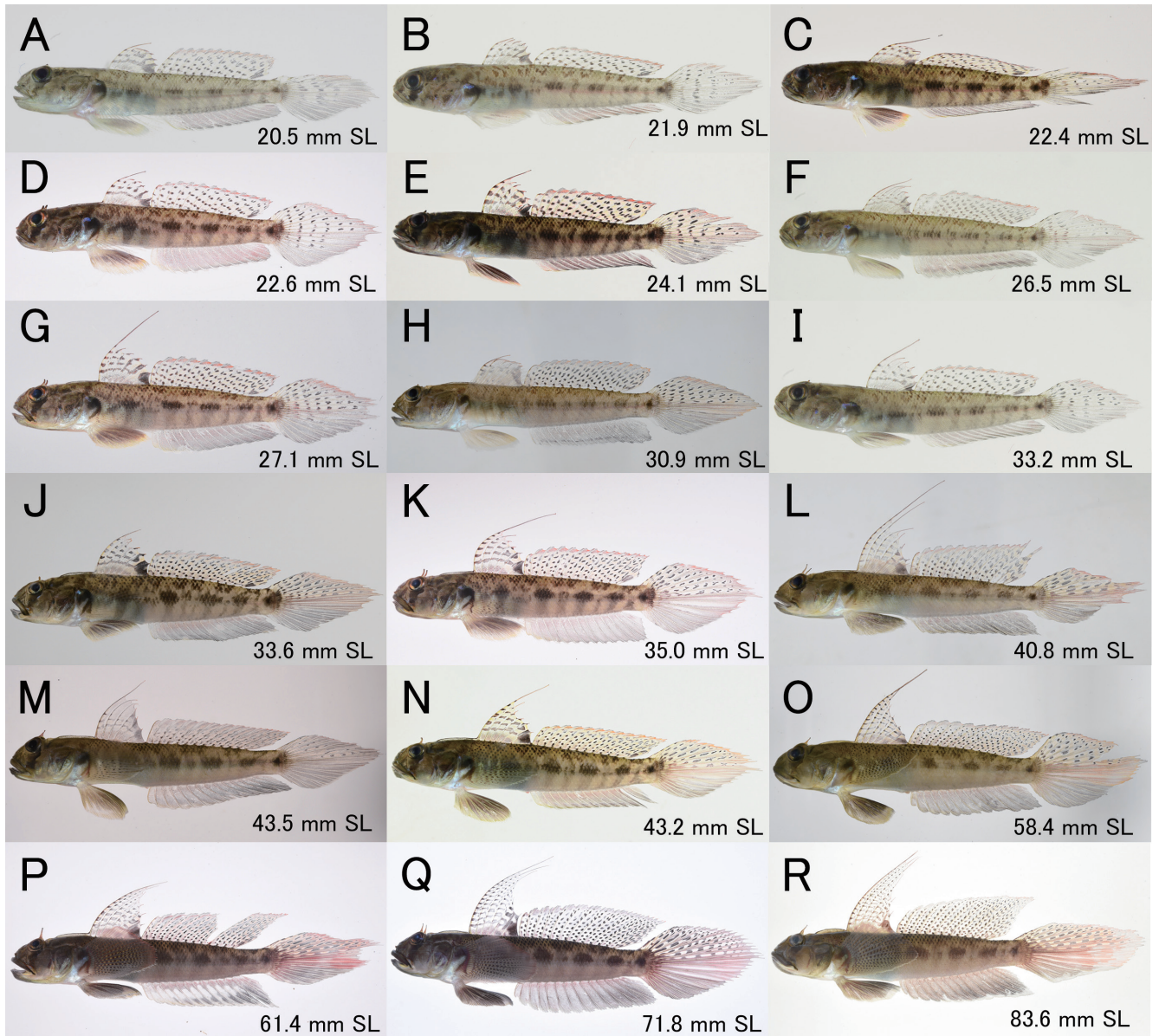


Fig. 3. Fresh specimens of *Oxyurichthys cornutus* from the Satsuma Peninsula, Kagoshima mainland (B, D–G, I–K, N, P, Q), and Tanega-shima (A), Yaku-shima (C, R), Kagoshima Prefecture, and Okinawa-jima (H, L) and Miyako-jima (M, O) islands, Okinawa Prefecture, Japan (A: KAUM-I. 132857, 20.5 mm SL; B: KAUM-I. 133928, 21.9 mm SL; C: KAUM-I. 163121, 22.4 mm SL; D: KAUM-I. 177788, 22.6 mm SL; E: KAUM-I. 161812, 24.1 mm SL; F: KAUM-I. 133930, 26.5 mm SL; G: KAUM-I. 177786, 27.1 mm SL; H: KAUM-I. 215119, 30.9 mm SL; I: KAUM-I. 133927, 33.2 mm SL; J: KAUM-I. 187558, 33.6 mm SL; K: KAUM-I. 177785, 35.0 mm SL; L: KAUM-I. 215118, 40.8 mm SL; M: KAUM-I. 180700, 43.5 mm SL; N: KAUM-I. 160312, 43.2 mm SL; O: KAUM-I. 180750, 58.4 mm SL; P: KAUM-I. 173240, 61.4 mm SL; Q: KAUM-I. 191226, 71.8 mm SL; R: KAUM-I. 210835, 83.6 mm SL).

体 (KAUM-I. 134132, 173241, 211318: Figs. 1A, D, 2G) がいることが確認された。マツゲハゼの第2背鰭の色彩について、鈴木ほか (2000) は棘先端と基底後端を結ぶ線より上方の鰭膜は一様に暗灰色で、下方の鰭膜上には暗灰色の小斑点が多数あり、各鰭条には暗色小斑を有するとしていた。本研究においてマツゲハゼとみなした標本では、鰭膜が一様に暗灰色となる範囲が第2背鰭上部全域におよぶ個体 (KAUM-I. 134129, 180715: Fig. 2E, F) や、第2背鰭上部後方に限られる個体 (KAUM-I. 132859, 132886, 134128, 134132, 173241, 211318, 215427: Figs. 1A, D; 2A, C, D, G, H), ほとんど暗灰色となる範囲がない個体 (KAUM-I. 179495:

Fig. 1C) がいた。また、鰭条上の暗色小斑についても第2背鰭上部全域にある個体 (KAUM-I. 179495, 215427: Figs. 1C, 2H) や、鰭条上にほとんど暗色小斑がみられない個体 (KAUM-I. 180715, 180716: Fig. 2B, F) がいた。これらの差異は連続的であり、本種の第2背鰭の色彩は種内変異が大きいと考えられる。第1背鰭第6鰭膜の黒色斑と胸鰭の暗色点はマツゲハゼとカマヒレマツゲハゼの識別形質とされているが (鈴木ほか, 2000), 前者はカマヒレマツゲハゼにも不明瞭な個体 (KAUM-I. 180700, 180750: Fig. 3M, O) が稀にいたこと (53 個体中 2 個体), 後者はマツゲハゼにも明瞭な個体 (KAUM-I. 179495, 215427: Figs. 1C, 2H) が

いること（12 個体中 2 個体）が確認された。体側背部の黒色点も両種の識別形質とされるが、マツゲハゼにも黒色点を有する個体（KAUM-I. 134128, 134132: Fig. 2D, G）がいる一方（12 個体中 2 個体）で、体長 26.5 mm 以下のカマヒレマツゲハゼにも黒色点が不明瞭な個体（KAUM-I. 133928, 133929, 133930, 133931, 148156, 176975: Fig. 3B, F）がいることが確認された（14 個体中 6 個体）。これらのことから、上記のうち特定の形質のみでの完全な識別はできないと考えられる。また、本研究では鈴木ほか（2000）と渋川ほか（2017）が示した識別形質のほかに、傾向的な差異としてマツゲハゼは尾鰭上葉の黒色斑が不明瞭であること（カマヒレマツゲハゼは明瞭）が確認された（Figs. 2, 3）。マツゲハゼとカマヒレマツゲハゼにみられる色彩の差異はいずれも傾向的であり、両種の識別は複数の形質に基づく総合的な判断を行う必要があると考えられる。

鹿児島県本土におけるマツゲハゼの記録は複数の文献で報告されている。明仁親王（1972）は市来産の本種の標本があったが紛失し、当標本がマツゲハゼであるかは不明であるとした。池ほか（1991）は薩摩半島永吉川産の 6 標本に基づきマツゲハゼを報告した。しかし、図示された 1 個体の標本写真は第 1 背鰭第 1 棘が長く伸長することからカマヒレマツゲハゼであると考えられ、他の個体についてもカマヒレマツゲハゼである可能性があるが、これらの標本は失われている（古橋ほか，2019）。これらのことから、山川ほか（2024）は上記の記録を鹿児島県本土におけるマツゲハゼの記録として扱っていない。本研究でも山川ほか（2024）の見解を踏襲し、明仁親王（1972）と池ほか（1991）の記録を鹿児島県本土における本種の記録に含めなかった。瀬能ほか（2004, 2021）は米沢俊彦氏の私信と池ほか（1991）に基づき、本種の分布に鹿児島県を含めた（山川ほか，2024）。米沢氏は鹿児島県本土の複数の河川で本種を採集しているが、いずれも標本や写真は残っていない（山川ほか，2024）。山川ほか（2024）によると、沖縄美ら島財団総合研究所には、薩摩半島万之瀬川産のマツゲハゼ 2 個体（URM-P 5589）とサルハゼ属の一種 3 個体（URM-P 5583, 5586）の標本が収蔵されているが、これらの標本は小型であるため、確実な同定が難しいとされている。したがって、マツゲハゼは標本や写真に基づく鹿児島県本土からの確実な記録がされていない（古橋ほか，2019；山川ほか，2024）。また、本種はこれまで沖縄県内では沖縄諸島や八重山諸島から報告されていたものの、宮古島からの記録はなかった。これらのことから、本研究は鹿児島県本土と宮古島からのマツゲハゼの確かな記録となる。

比較標本 マツゲハゼ（6 標本：体長 24.7–63.9 mm）：KAUM-I. 132859, 24.7 mm SL, KAUM-I. 132886, 32.5 mm SL, 鹿児島県熊毛郡南種子町大浦川 種子島；KAUM-I. 134128, 36.5 mm SL, KAUM-I. 134129, 38.1 mm

SL, KAUM-I. 134132, 47.4 mm SL, KAUM-I. 215427, 63.9 mm SL, 鹿児島県大島郡奄美市住用町 川内川河口（内海）奄美大島。

カマヒレマツゲハゼ（53 標本：体長 17.3–83.6 mm）：KAUM-I. 191303, 31.4 mm SL, KAUM-I. 192206, 21.9 mm SL, 宮崎県串間市 天神川河口；KAUM-I. 177785, 35.0 mm SL, KAUM-I. 177786, 27.1 mm SL, KAUM-I. 177787, 22.2 mm SL, KAUM-I. 177788, 22.6 mm SL, 鹿児島県南さつま市坊津町泊 泊川；KAUM-I. 133926, 30.3 mm SL, KAUM-I. 133927, 33.2 mm SL, KAUM-I. 133928, 21.9 mm SL, KAUM-I. 133929, 18.8 mm SL, KAUM-I. 133930, 26.5 mm SL, KAUM-I. 133931, 23.1 mm SL, 鹿児島県南さつま市 笠石川；KAUM-I. 121817, 37.6 mm SL, KAUM-I. 123327, 30.1 mm SL, KAUM-I. 123397, 39.4 mm SL, KAUM-I. 128082, 29.5 mm SL, KAUM-I. 148156, 18.6 mm SL, KAUM-I. 160309, 58.8 mm SL, KAUM-I. 160310, 47.0 mm SL, KAUM-I. 160311, 48.0 mm SL, KAUM-I. 160312, 43.2 mm SL, KAUM-I. 173268, 57.3 mm SL, KAUM-I. 173269, 37.1 mm SL, KAUM-I. 176975, 17.3 mm SL, KAUM-I. 187558, 33.6 mm SL, 鹿児島県南九州市穎娃町別府番所鼻自然公園地先；KAUM-I. 161812, 24.1 mm SL, KAUM-I. 173240, 61.4 mm SL, KAUM-I. 187569, 21.7 mm SL, KAUM-I. 191226, 71.8 mm SL, KAUM-I. 191227, 70.1 mm SL, 鹿児島県南九州市穎娃町別府 水成川；KAUM-I. 194946, 70.0 mm SL, KAUM-I. 194949, 44.0 mm SL, KAUM-I. 194950, 44.0 mm SL, 鹿児島県指宿市大牟礼 二反田川河口；KAUM-I. 132857, 20.5 mm SL, KAUM-I. 132888, 42.4 mm SL, KAUM-I. 132889, 39.7 mm SL, KAUM-I. 132890, 24.7 mm SL, 鹿児島県熊毛郡南種子町大浦川 種子島；KAUM-I. 163120, 25.8 mm SL, KAUM-I. 163121, 22.4 mm SL, KAUM-I. 210835, 83.6 mm SL, 鹿児島県熊毛郡屋久島町栗生 栗生川 新栗生橋の南西 200 m の漁港；KAUM-I. 131547, 31.7 mm SL, 鹿児島県大島郡奄美市住用湾 奄美大島；KAUM-I. 132475, 37.5 mm SL, 鹿児島県大島郡龍郷町龍郷湾奥の干潟 奄美大島；KAUM-I. 134131, 37.5 mm SL, KAUM-I. 215426, 61.3 mm SL, 鹿児島県大島郡奄美市住用町 川内川河口（内海）奄美大島；KAUM-I. 134369, 62.6 mm SL, 鹿児島県奄美市住用町山間 役勝川河口 奄美大島；KAUM-I. 215420, 54.1 mm SL, 鹿児島県大島郡瀬戸内町小名瀬の干潟 奄美大島；KAUM-I. 177490, 36.5 mm SL, 鹿児島県大島郡瀬戸内町三浦 三浦川河口 加計呂麻島；KAUM-I. 177529, 44.3 mm SL, 鹿児島県大島郡瀬戸内町俵 加計呂麻島；KAUM-I. 170730, 39.4 mm SL, 鹿児島県大島郡徳之島町亀津大瀬川 徳之島；KAUM-I. 215118, 40.8 mm SL, 沖縄県名護市真喜屋 沖縄島；KAUM-I. 215119, 30.9 mm

SL, 沖縄県名護市湧川 沖縄島; KAUM-I. 180700, 43.5 mm SL, 沖縄県宮古島市平良狩俣 島尻川河口 宮古島; KAUM-I. 180750, 58.4 mm SL, 沖縄県宮古島市下地川満川満大川(ウプカー) 宮古島。

謝 辞

本報告を取りまとめるにあたり、鹿児島大学大学院連合農学研究科の古橋龍星氏、東京大学教養学部の尾山大知氏にはマツゲハゼの記録に関する情報をご提供いただいた。鹿児島大学総合研究博物館魚類分類学研究室の学生やボランティアのみなさまには、標本の作製および登録作業においてご協力いただいた。Ichthy 担当編集委員の畑 晴陵氏と匿名の査読者には原稿に対して適切な助言をいただいた。以上の方々に深く感謝申し上げる。本研究は鹿児島大学総合研究博物館の「鹿児島・琉球列島の魚類多様性調査プロジェクト」の一環として行われた。本研究の一部は公益財団法人日本海事科学振興財団「海の学びミュージアムサポート」、JSPS 科研費 (20H03311・21H03651・23K20304・24K02087), JSPS 研究奨励費 (DC2: 24KJ1838), JSPS 研究拠点形成事業—B アジア・アフリカ学術基盤形成型 (CREPSUM JPJSCCB20200009), 文部科学省機能強化費「世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローバル教育研究拠点形成」, および鹿児島大学のミッション実現戦略分事業 (奄美群島を中心とした「生物と文化の多様性保全」と「地方創生」の革新的融合モデル) の援助を受けた。

引用文献

- 明仁・坂本勝一・池田裕二・藍澤正宏. 2013. ハゼ亜目, pp. 1347–1608, 2109–2211. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第3版. 東海大学出版会, 秦野.
- 明仁親王. 1972. 神奈川県で採集されたマツゲハゼ *Oxyurichthys ophthalmonema* とその学名の検討. 魚類学雑誌, 19: 103–110.
- 出羽尚子・中村潤平・藤井琢磨・是枝伶旺・渡部泰斗・本村浩之. 2022. 鹿児島県薩摩半島から得られたヒメツバメウオ. *Nature of Kagoshima*, 49: 149–152.
- 江口勝久・中島 淳・西田高志・乾 隆帝・中谷祐也・鬼倉徳雄・及川 信. 2008. 宮崎県北川の魚類相. 九州大学大学院農学研究院学芸雑誌, 63: 15–25.
- 古橋龍星・是枝伶旺・赤池貴大・本村浩之. 2019. 鹿児島県薩摩半島南岸から得られたミナミサルハゼとカマヒレマツゲハゼの記録 (ハゼ科: サルハゼ属) および両種の生息環境に関する新知見. *Nature of Kagoshima*, 46: 81–87.
- 池 俊人. 1995. 上甕島の淡水魚類. 武岡台高校研究紀要, 7: 1–7.

- 池 俊人・西村一郎・松野知之・米沢俊彦. 1991. 永吉川の魚類相. *LEBEN*, 21: 46–52.
- 是枝伶旺・古橋龍星・久木田直斗・本村浩之. 2022. 薩摩半島から得られた九州初記録 10 種を含む, 鹿児島県本土初記録の暖水性魚類 16 種. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 17: 20–38.
- 是枝伶旺・百瀬 樹・本村浩之. 2024. 薩摩半島から得られたミナミヒメハゼの記録, ヒメハゼ属の一種 *Favonigobius* sp. sensu Matsui et al. (2014) の国内における分布状況, および両種の標徴に関する新知見. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 40: 1–16.
- 是枝伶旺・本村浩之. 2022. 薩摩半島から得られた北限記録となる熱帯・亜熱帯性ハゼ科魚類 3 種 (トサカハゼ, スダレウロハゼ, イワハゼ). *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 26: 4–17.
- 三宅崇智・佐竹直人・黒木広大・町田吉彦. 2006. 高知市浦戸湾南部に生息するハゼ科魚類. 四国自然史科学研究, 3: 38–49.
- 百瀬 樹. 2024. 本州から得られたヒメハゼ属魚類 4 種の記録とその識別形質について. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 45: 19–45.
- 森口宏明. 2019. 静岡県におけるマツゲハゼの初記録. *南紀生物*, 61: 160–164.
- 森下悟至・本村浩之. 2019. 有毒魚類ツムギハゼの九州沿岸における標本に基づく初めての記録. *Nature of Kagoshima*, 45: 211–215.
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp.
- Motomura, H. 2023. An annotated checklist of marine and freshwater fishes of Tanaga-shima and Mage-shima islands in the Osumi Islands, Kagoshima, southern Japan, with 536 new records. *Bulletin of the Kagoshima University Museum*, 20: 1–250.
- 中坊徹次・中山耕至. 2013. 魚類概説 第三版, pp. 3–30. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第3版. 東海大学出版会, 秦野.
- Nakae, M., H. Motomura, K. Hagiwara, H. Senou, K. Koeda, T. Yoshida, S. Tashiro, B. Jeong, H. Hata, Y. Fukui, K. Fujiwara, T. Yamakawa, M. Aizawa, G. Shinohara and K. Matsuura. 2018. An annotated checklist of fishes of Amami-oshima Island, the Ryukyu Islands, Japan. *Memoirs of the National Museum of Nature and Science*, Tokyo, 52: 205–361.
- 岡村恭平・津野義大・富山陽聖・遠藤広光. 2022. 高知県初記録のカマヒレマツゲハゼ. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 27: 7–10.
- Pezold, F. and H. K. Larson. 2015. A revision of the fish genus *Oxyurichthys* (Gobioidae: Gobiidae). with descriptions of four new species. *Zootaxa*, 3988: 1–95.
- 瀬能 宏・鈴木寿之・渋川浩一・矢野維幾. 2004. 決定版 日本のハゼ. 平凡社, 東京. 536 pp.
- 瀬能 宏・鈴木寿之・渋川浩一・矢野維幾. 2021. 新版 日本のハゼ. 平凡社, 東京. 588 pp.
- 渋川浩一・武藤文人・鈴木寿之・藍澤正宏. 2017. 浜名湖から得られたハゼ科サルハゼ属の 1 未記載種と日本産同属魚類の現状. *東海自然誌*, 10: 45–57.
- 鈴木寿之・瀬能 宏・坂本勝一・岩田明久・藍澤正宏. 2000. ナガセハゼの記録およびマツゲハゼに関する分類学の問題. *伊豆海洋公園通信*, 11 (6): 2–6.
- 山川宇宙・鎗田めぐ・森口宏明・尾山大知・深川元太郎. 2024. 千葉県房総半島および長崎県福江島で採集されたマツゲハゼ. *南紀生物*, 66: 29–32.
- 吉郷英範. 2014. 琉球列島産陸水性魚類相および文献目録. *Fauna Ryukyuna*, 9: 1–153.